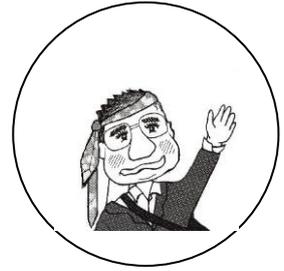


大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「Very good departure、また会う日まで」④

アートマンとは何か。真我、霊我、靈魂などと訳されることがある。読者諸氏よ、これで分かるだろうか。われわれの内奥のなかにある本当の純粋な「自己」というわけだが、それでも分からない。

仏教では、そんな不滅で独立したものは無いという立場である。無いというのは簡単だが、それでは寂しいじゃないの、とわが輩は思う。死ねば灰になるだけということになる。

先日わがボス教授から昼食のお誘いを受けた。大阪箕面の「風の杜」という大阪平野が一望できる素晴らしいホテルに案内された。教授は単身でマレーシアに移住にするので、その前に事情説明ということであった。マレーシア林住期に入る。奥さんからは「帰って来るな」と言われたらしい。

もう一人教授がいた。インド哲学が専門である。そこでわが輩は訊ねた。

「死んだらどうなるのでしょうか。生まれ変わりはありますか？」

教授は少し間をおいて答えた。

「ローカーヤタ派に近い。半分はローカーヤタ派です」

ローカーヤタ派は、ブッダのころの唯物論的な学派である。世界は地・水・火・風の四元素で成り立ち、それが離合集散するだけで、靈魂、アートマンのようなものを否定する。つまり死んだら灰になるだけ、ということである。哲学教授はそれに近い考えをもっているようである。わが輩が注目したのは不明の半分についてである。明解な部分は、(科学的)知識によるものである。もう半分とは何か。人間の感情である。知識で感情を越えることは、たとえ哲学教授でも難しい。

愛読書の『ブッダが考えたこと』(宮元啓一)に、輪廻思想についての次の見解が述べられている。

近年の多くの日本人が輪廻思想に共感を覚えるのは、「再生の繰り返し」と「再死の繰り返し」のうち、圧倒的に「再生の繰り返し」に共感を覚えるからである。

インド人は・・・もっぱら再死に恐怖に満ちた関心を抱いてきたのである。

圧倒的な者たちの内の一人がわが輩である。わが輩は怠惰ばかりの人生だから、(再生があるなら)次こそは怠けない人生をおくればよい、などとお気軽に思う一人である。だから今現在に執着することも少ない。

(次はまともにやろうよ。皆さま方よ)

確かに理論的には宮元先生が正しい。しかし、これは高位階級のバラモン理論ではないだろうか。カースト低位層は、次はなんとかよい生活をとるのが人情というものではないだろうか。そうすると死んだら灰になるでは虚しすぎる。次に輪廻するためには、それを成り立たせる何か、基体が必要なのではないだろうか。それをアートマンという概念に託していると考えられないだろうか。

映画「ガンジスに還る」を観て、わが輩の根拠なき見解も結構的を射ていると思った次第である。

人が灰になるだけなら、儀礼としての葬儀も墓も散骨も不要である。追悼することでさえも意味がない。しかしわれらの記憶は残る。それを抹消することは容易に出来ない。悲しい記憶は悲しい。

(どうすればいいの?)

われらは 31 日にガンジスの上流にある行者の故郷リシュケーシュに着いた。そこで老母を残して逝ってしまった仲間の写真 (A 4 紙大) をガンジスに流すことにした。アートマンの存在を信じていた彼女の追善供養の意味もあったが、わが輩の記憶を楽にしたい、そんな気持ちもあった。聖河に流す花灯明 (ディヤー) の火力を借りて写真を燃焼させようとしたが、燃え尽きない。そのまま流すと、驚いたことに、まるで鯉が餌にパクリと食らいつくように、“生きものガンジス”があつという間にもち去ってしまった。

今回は出家者を日本に招き講義をして頂いた。そのお礼を述べる為にインドにやってきた。総長にご挨拶して部屋からでたとき、一人の女性出家者にばったり出会った。

「お父上 (出家者) はお元気ですか」

聞けば、二年前に亡くなったと言う。

「最期はどのようでしたか」

「Very good departure」(ベリー・グッド・デパーチャー)

わが輩はこのことばに甚く感動した。この感動話を読者諸氏にもおすそ分けしておこう。

父親はカナダ人で、出家名をアートマスヴァルーパーナンダという。商工会議所の会頭をしていた。前総長チダーナンダ大師を敬慕していたが、ある日「あなたが出家するときがきた。いつでもインドに来なさい」と師に言われた。しかし彼には妻子がいた。そのとき妻が何と言ったか。

「いってらっしゃい。あなたがいつ帰って来てもよいように、あなたの部屋の机もペンもそのままにしておきます」

素晴らし妻のことばだと思わないかい。読者諸氏よ。

そこでわが輩は訊ねた。

「いつカナダに帰るのですか」

「分からない。神だけがご存知です。帰ろうと思えば、明日にでも帰ることができる」

数年して娘がインドにやって来て女性出家者になった。

見習い僧は白衣を、正式な出家者になると厳粛な儀式でオレンジ色の僧衣を頂くのが慣例である。ところが、ある年のクリスマスの日にホールに座っていると、大師が静かに近づきオレンジ色のショールをそっとかけた。出家者と印可された瞬間である。

粋なハカライだと思わないかい。読者諸氏よ。(形式じゃないんだよ)

暑いインドのこと、さまざまな問題がある。いつ帰るのか、帰らないのか俗っぽい関心をもっていた。しかるに、女性出家者は言った。

「Very good departure」

直訳すれば「大変素晴らしい出発」である。「departure」には「死去」の意味もある。だが単に灰になることではない。そこには“大いなる歓び”が含まれている。肉体をもつ「苦」から解放されたからである。

このことばを聞いて、老母の介護から解放された彼女は「Very good departure」だと思えるようになった。すべての「苦」をカンジスが呑み込んだ。アートマンに何の苦しみがあろうか。

わが旧友“おじゃま虫”も、「Very good」といえないが、「Good departure」だ。友よ、しばしのお別れだ。また会う日まで。